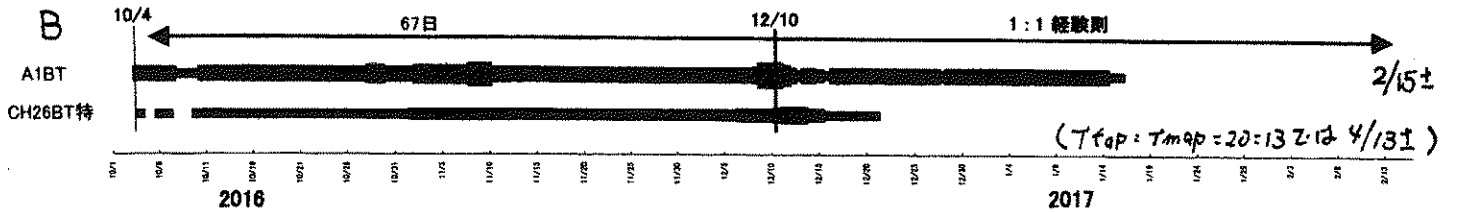
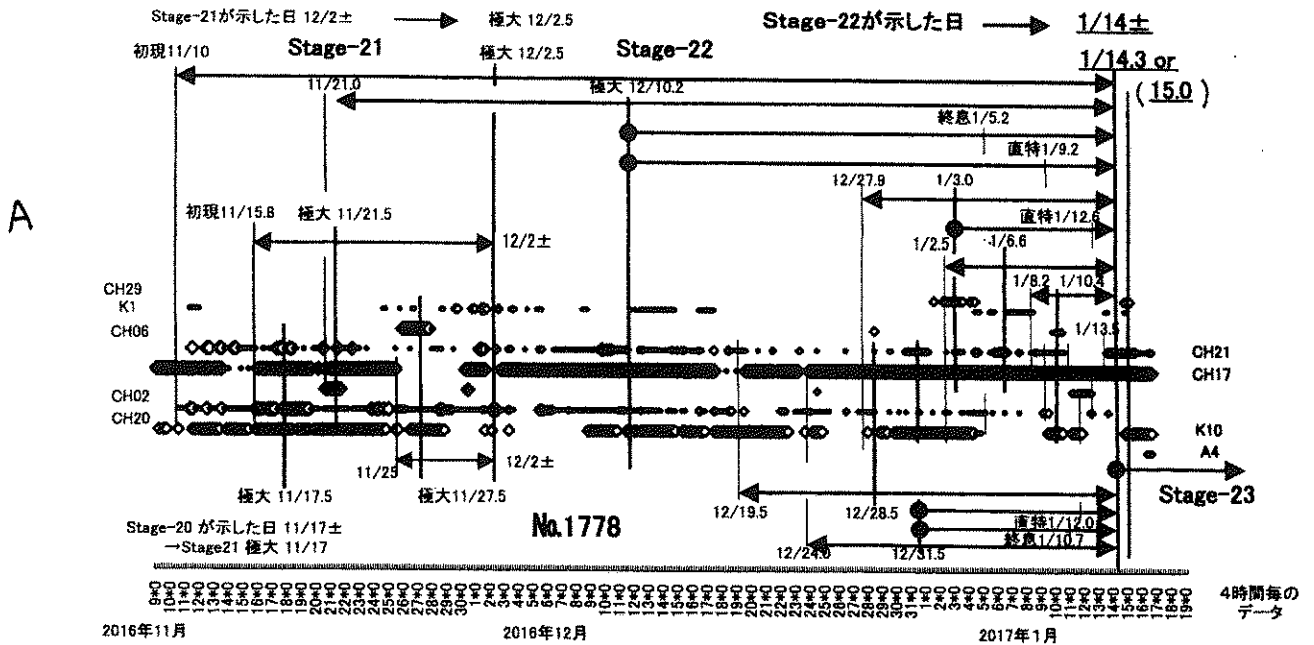


原稿校了後の前兆変化について

八ヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

No.1778 長期継続前兆 続報 現況報告

1/14極大←第22ステージが示した日・地震発生日は前兆終息後推定



上図(上) A=No.1778地震前兆 上図(下) B=火山帯近傍地殻地震前兆

第22ステージが示した01月14日±に極大認識できます。

しばらく静穏基線だった八ヶ岳のCH21に糸状特異前兆が出現。CH29及び高知観測点K1にも弱い特異が出現しました。CH21糸状特異の極大は、1/14.3と認識されます。CH26・K1特異は短時間出現で中心は1/15.0です。01月13日夕刻にCH20,K1に特異が短時間出現して終息していることから、1/15.0が極大ではなく、1/14.3 (CH21特異顕著部) が極大認識が良いと思われます。

第22ステージが示した01月14日±が発生日ではなく、次の第23ステージの最初の極大(1/14.3)となったことは明らかです。

現在継続出現中の前兆は、CH17糸状特異継続。CH21弱い特異。その他、1/14夜から高知観測点のK10に弱い特異断続的継続出現。1/15朝から秋田観測点のA4にも弱い特異が認められます。

第23ステージとなった現在、第23ステージが示す日を求めるためには、前兆初現～極大 または 前兆極大～終息 のどちらかのデータが無いと経験則を使用して求められません。

現在迄の前兆を見直しても、1/14±を示す第22ステージ前兆の関係は認識できますが、1/14極大に対する初現と思われる前兆が識別できません。従いまして、第23ステージが示す日を求めるには、今後の前兆変化 (新たに出現する極大又は前兆終息

※No.1778前兆対応活動の領域、規模の推定は前の情報内容と変更無し。

を観測して確認してからでない」と計算できません。

上図上のAはNo.1778地震前兆ですが、その下に掲載したものは火山帯近傍地殻地震前兆です。2016,10/4 初現で12/10 極大認識です。群発経験則では1/14±を示しましたが、鳥取中部地震と同様に 1:1 経験則を使用しますと2/15±を示します。ちなみに火山帯近傍地殻地震前兆を通常の地震前兆経験則である、初現～発生：極大～発生= $T_{fap} : T_{map} = 20 = 13$ 経験則に当てはめると、04月13日±を示します。

火山帯近傍地殻地震前兆の極大=2016,12/10がNo.1778前兆の第22ステージの極大と同じであることから、関連がある可能性が濃厚です。従って、仮に同一活動を示している前兆である場合は、火山帯近傍地殻地震前兆が示す02月15日±又は04月13日±どちらかをNo.1778前兆も示す可能性もあります。いずれにしても今後の観測を続け、推定したいと考えます。火山帯近傍地殻地震前兆から群発経験則では活動がなかったことから、対応活動は熊本地震の様な複合地震活動では無い可能性が示唆されます。仮に火山帯近傍地殻地震前兆とNo.1778前兆が同一活動を示す前兆である場合は、2/15±又は4/13±のどちらかが、最終的な発生日の可能性有。今後の変化を観測し続報します。